

柔らかな光と静寂が包む
凜とした姿を目に留め
大地から切り離す
次世代につなぐ年月
私は木と共に歩もう



兵庫 泉 さん

静岡県島田市

株式会社 兵庫親林開発 代表取締役

父の跡を継ぎ林業の世界へ。空へ真っすぐ伸びる木を愛情をもって管理する。初めて聞いた、木が倒れる瞬間の衝撃を忘れずに、急傾斜地などの厳しい現場でも知恵と技術で伐採し余すことなく使い切る。





P19: 島田市伊久美の京柱峠で、兵庫親林開発の伐採跡地を案内する兵庫泉さん。山の上は澄明な空気だが、急峻な沢の伐採は非常にきつく、とりわけ伐採した樹木を林道へ運び上げる作業は困難を伴った

P20: 山の中へ分け入って樹木の様子を確認する(右上)。伐採跡地を案内してくれる泉さんは、山林専用のスパイク地下足袋で軽やかな足取り(右下)。山の中ではマーキングが必要なので、愛用の軽トラックにはマーカーも常備していると教えてくれる(左上)。山の木の本一本を見る目は真剣だ(左下)

父の跡を継ぎ林業の世界に

森を相手に仕事をする女性社長と聞いて勝手に想像していた人物像とは違って、あいさつを交わした兵庫泉さん(45歳)は、小柄でチャームिंगな人だった。

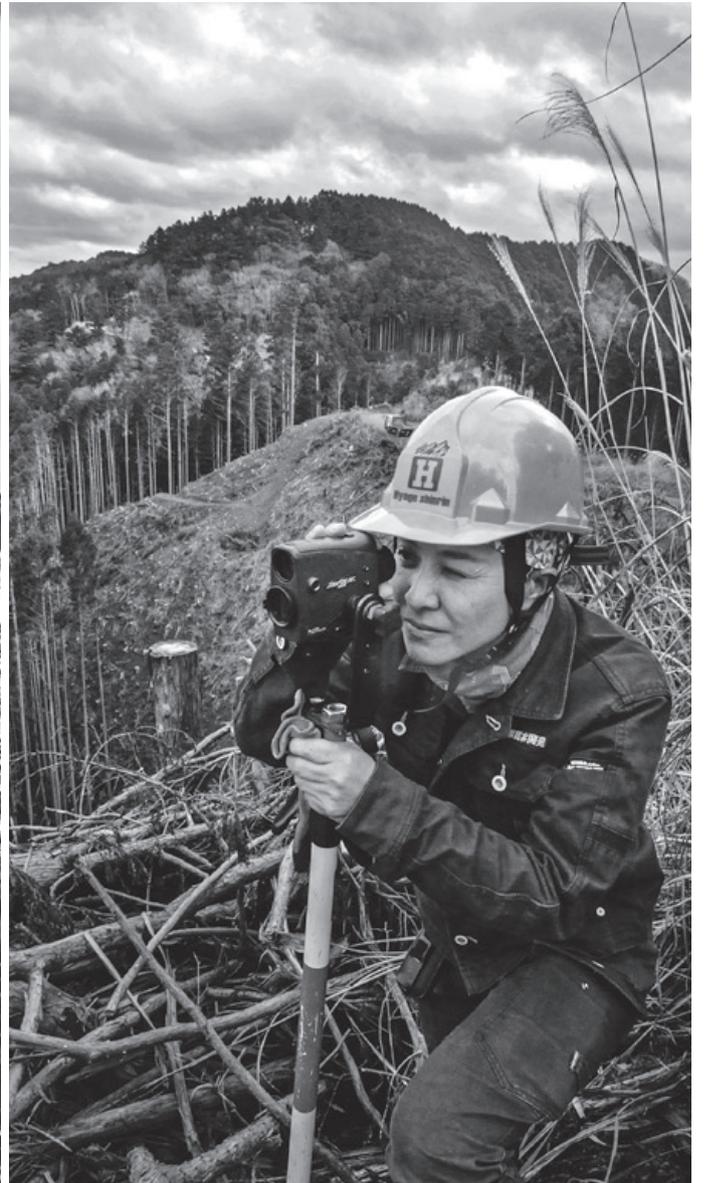
山の管理は、全国的に各地の森林組合に委ねられているが、父の兵庫正晴さん(73歳)は若い頃から製茶農家の傍ら、冬場は個人で林業に携わってきた人で、間伐作業をはじめ神社や民家の樹木を切る仕事などを請け負ってきた。2010年に法人化して「兵庫親林開発」を創業。静岡県島田市に事務所を構えてスタートを切った。長女の泉さんは、18年に社長に就任。5年が経つ。

まずは現場を見せてほしいと、兵庫さんの軽トラックについて行く。市内を抜けると、両側に木々がうっそうとしげり、次第に山道に入っていく。車1台がようやく通れる細い林道が、くねくねと曲がって続く。兵庫さんの車を見失うこと二度三度。しばらく行くくとわれわれを待っていて、どンドン登って行く。

40分ほど走っただろうか。「ここは山中沢といって、こっちは日影沢。最近開通した林道京柱線と呼ばれます」

空気がひんやりとして、光が澄んでいる。さわさわと木々を渡る風の音が聞こえる。

「ここは一昨年冬に請け負った、うちらしい仕事の現場です。元々、林道沿いの木が風で倒れたんです。とても良いヒノキなので、



森林伐採はまず伐採範囲を測量することから始まる(右) 木を見れば、いかに大切に育てられた木かわかる(左)

切って出しましょう、と地主さんに交渉したんです」

山の厳しさに向き合う

兵庫さんが指さした1帯は、伐採され尽くして切り株だけが列をなしている。残材はなくきれいに片付けられた伐採跡地だ。歩けばそのままズ・ズ・ズと滑り落ちそうなほど、急峻な斜面だ。一体、切った木はどうやって運び出したのだろうか。

「急傾斜地なので大変でした。重機は入れられないので、チェーンソーで列ごとに伐採していった、その木に繊維ロープをかけて、一本一本機械で林道に引き上げるんです。機械がなかった時代は、人力でやった仕事なんですよ」

集材した木は、枝葉を取って丸太にする。太い木は手作業で枝打ちしてから4人に造材する。「造材は機械でできるけれども、曲がつている木のどこで取るか、見極める目も技術力なんだと思います。それで素材としての単価もすごく変わるので」

原木市場に出材すれば、切り出した木には値段がついて山の持ち主の収益になる。出材の提案が生んだ新たな仕事。それが、「うちらしい仕事」ということなのだ。

「森林組合との隙間を縫って、森林の所有者に新しい提案をすることで、現場につながりました。うちとしては、できる限り材木で出せるところは出したいと思うんです」

間伐は国の事業として補助金で賄い、地



泉さんが信頼して仕事を任せている兵庫親林開発の仲間たち(上) 愛犬シロは、いつも一緒。山へ行くときもトラックに乗って同行する(下)

主さんには材木代金を何%かをお返しするのである。「現代では、山主さんがお金を掛けられないことが常態化しているんです」

もう一カ所の現場には、凜と美しいヒノキが立ち並んでいた。山の中の木を切つて農道とつなぐ道造っている最中だという。

「樹齢は60年ほどだと思えます。まんべんなく陽が当たるように枝打ちもされて、管理されていたんですね。山を見たら持ち主の

手入れや愛情がわかります」

現場近くでは、大型機械が4台待機中だ。

丸太をつかんで荷役をおこなうグラブプルと呼ぶ重機の車体には、最大積載量6000^{キログラム}とある。パワーがあつてスピーディに作業が運ぶという。

「自分の機械があると、手足のように使えて助かっています。現在では、機械なくして山の仕事はできないと思います」

人ありきの仕事

会社には6人の社員がいる。特殊伐採を主とする父の従業員が3人、山の現場を任せる班長たち泉社長を支えるスタッフが3人。

兵庫さん自身は、山では測量の仕事が基本だ。時には、林道から木材市場まで材木を積んだ車を走らせることもあるが、社長としての仕事の要は森林所有者との交渉だ。多くの地主が、森林組合の組合員であるし、昔から何十年も同じ人に山を任せているケースも多く、なかなか一筋縄ではいかない。

「うち個人で新規に開拓して現場を造つて行く難しさを、日々実感している最中です」

山というのは共有が多い。一つの山が何十人も共有というだけでなく、登記簿で追跡しても追えない場合が多い。

「結局、最初に案内したような急傾斜地の仕事が多くなって、厳しさが伴うんです」
でも、と兵庫さんが言葉を継いだ。

「人ありきなんです。社員には、厳しい現場でやっている技術力があるので、それを大事にしてやりたいし、持っているポテンシャルを發揮できる現場をもっとやらせてあげたいと思います」

全国できこり人口は減少する一方で、人を育てていくことが今後の課題だという。危険な仕事だけに命を預かることにもつながるが、「やっていくからには、見合った収入が得られるような経営をやつて、林業従事者の地位の向上に努めたいと思うのです」

父の手がける特殊伐採は、神社や民家で樹齢を重ね巨木化し、危険な状態になっている木の伐採だ。重機が入らない場所も多く、切った樹木をクレーンで上へ吊り上げるのだという。「空師^{そらし}つていうんです」

なんとダイナミックな名称だ。長い時間を生きてきた木を倒すには、相応の知恵や技術力を必要とする世界なのだ。

兵庫さんは、初めて聞いた木の倒れる瞬間の音を、今でも忘れられないという。

「ビシ・ビシ・ビシと音がして、木が切り離されて動いて、すごい音と風や匂いが一斉にどよめいて……衝撃的でした。今でも、木が倒れる際にはドキドキします」

跡継ぎのはずだった兄が亡くなり、父の仕事の片腕だった夫との離婚を経て、若いときには夢にも思わなかった林業に携わることになったが「自然を相手にするって、スケールが壮大で気持ちがいいんです。自然に生かされているということをすごく感じます」

素材の展開も考え続けていることの一つだ。端材で薪^{まき}を作ったところ、キャンプ人気によって思わぬ反響があった。

「捨てずに、木を余すことなく使い切る薪の先に何ができるか考えています。材木市場へ出して終わりではなく、その先をもっとやっていきたい。日本の木の利用が、もっともっと広がるとうれしいと思います」

社名の「親林」のように、兵庫さんの視点からは、林業の多様性を模索し続けている。

(片柳草生／文 河野千年／撮影)